

第3回

BankART1929

について

池田修(BankART1929)
曾我部昌史(建築家)
北川フランム

北川フランムの「対談」

連続6回シリーズ

BankART妻有のプロジェクト概要と

今後の展開・考え方?

「空家プロジェクト」に詳しい

北川一今日はBankART妻有に焦点を合わせるわけですが、日本で最も元気なアートシーンをやっているBankARTそのものの展望についても伺いたい。

曾我部一BankARTからは、いくつか特殊なお仕事をいただきまして、最初に作らせていたいたいのはこれですね。BankARTにNYKという日本郵船の建物があり、そのアプローチです。



本組み立ててアプローチを立てたせました。他のプロジェクトも含めて、いずれもセルフビルトと言いますか、ほとんど発注をしないで自分で作るということをやりました。それまでは、そういったものが全くなかつたわけじゃないんですけれども、BankARTと付合つていくうちに、あれよあれよとそっちの方に活動枠が広がってきました。(以後BankART妻有のプレゼンテーション。冊子

BankARTが、経済的に自立していくために、自力をつけていかないと。



左から: 北川フランム・池田修・曾我部昌史

「」ういうもの(BankART妻有)を都市の人間が田舎に持つということが大切と思っています

もあり、百作家ぐらい招きたいと思っています。これは作品を作つてもいいし、建築的な改修に関わるものでもいい。そんなに決め事はしませんでした。こんな感じがBankART妻有がやっていることです。今後についてはあまり考えていません。かなりスローでいいと思っていて、曖昧な構想はあります。こういうものにしていきたいとかいう感じはありません、良い意味でも悪い意味でも、こういうものを都市の人間が田舎に持つということが大切と思っています。それによって始まることが僕らの財産になつていくと思います。北川一BankARTをどうしていくのですか?

池田一今年度から本格的事業に入りました。最初2年は実験事業でそれで終わるかも知れなかつたんだけど、今年から3年間はやるという話になりました。その計画案を3つ出しました。一つが経済的なさらなる自立です。それから地方都市およびインターナショナルネットワークの構築。最後が創造界限という言い方をしているんですけど、横浜のクリエイティブシティという言葉です。これのリーダーシップをとっていく。この3つをやるという方針で今年度から入つてい

今まで横浜が誘致したり発信してきたのをいかに続けるかというシステムを作るというのは、本来は行政がやらなきやならない仕事です。曾我部さん達とか、すごい優秀な人たちが来ているから、行政が次の受け口をやらなければ。横浜市も3分の1は引き受けたんだけど、結局は曾我部さんたちは行くところがなかつた。僕は結構不動産屋巡りをしました。10軒ぐらい。もう断られまくりで、それでも最終的には本町に行き着きました。あと経済的な自立というのは、うちは横浜市からも補助金をもらつていて、そのお金が毎年1割ずつカットされていきます。それをどう補完するか、自力というか、それを作つていかなければならぬ。今やっているのは、コードティネット、外の事業の手伝いをかなり、スマートの部分に立派な建築家の曾我部さんに入つてもらいました。そして、セミナーなどを行うことと、色々な作家のレイヤーで重ねていきたいという気持ち

北川一こつちの考えなどははたかだか数十年の中でのものでしかなく、それは思想に影響されているわけです。それに比べて、やっぱり何百年とか現実的な生活をしてきた人たちには、思想なんてことを抜いて、もっと強力だよね。だからそつちに合わせて一緒に面白いことをやる方がいいんだと思ったというのが、もういいや、という感じになつたというのが、公と徹底的にやろうと思つたきっかけですね。だからそこは池田さんと対象は違うけど似ていますね。それが池田さんに対する答えです。